

令和7年度 中伊豆リハビリテーションセンターわかば地域連携推進会議議事録

◎日 時 令和7年12月17日（水）14：30～15：20

◎場 所 農協共済中伊豆リハビリテーションセンター施設棟2階パブリックルーム

◎出席者 推進員：藤原洋恵様

利用者代表：田中宏美様

利用者ご家族：藤田千恵子様、他5名

行政：渡森隼斗様（伊東市） ※参加予定者の内、急遽の欠席者複数名あり

成年後見人：三田忠男様

計画相談：芹澤美和様

わかば：五十嵐（施設長）、尾崎、浅賀、杉原、青木

◎司 会 尾崎

◎記 録 青木

◎議 事

1. 開会あいさつ（五十嵐）

2. 出席者紹介

3. 議事

【事業の運営状況に関するご報告】（杉原）

- ・令和7年度の農協共済中伊豆リハビリテーションわかば（以下：わかば）の事業運営の重点取り組み事項は、利用者参加型の個別支援会議の充実化・障害特性を理解する為の職員研修の充実化・大規模災害時にも必要な事業を継続するためのBCPの見直し・地域活動の場への参加・活動の機会を広げるための情報収集の強化・経営基盤の強化と風通しの良い職場づくりの推進の5点である。

【施設生活のご紹介】（杉原）

- ・歯科衛生士による口腔ケア指導・言語聴覚士による食事評価・管理栄養士による食事指導
嘱託医、看護師による日々の健康管理・リハビリ、クラブ活動・季節行事の様子・外出支援の様子
地域移行や外泊評価の様子・防災、防犯、避難訓練について写真を交えて紹介する。

【身体拘束適正化に関するご報告】（杉原）

- ・わかばを含む中伊豆リハビリテーションセンター福祉部（以下：福祉部）では、身体拘束適正化委員会を共同設置し部内全体で意見を出し合える仕組みを設けている。令和7年12月現在、身体拘束の状況として車椅子からの転倒転落の予防、離棟防止に関わるセンサーの設置を行っており、毎月の課内会議や3か月に1度の利用者個別支援会議内で見直しやアセスメントを実施している。また併せて福祉部内では毎月、身体拘束適正化委員会を実施し、わかば内の情報を福祉部内で共有している。
身体拘束適正化に向けて、本人様の行動抑制にならないもの（それをする事で本人様の助けになるもの）や安心して生活ができるものについて身体拘束対応として捉えず、都度見直しを行い、目的や状態を確認し意見を出し合う事で利用者様の生活の質の向上に取り組んでいる。

【事故・ヒヤリハットに関するご報告】（杉原）

- ・令和7年度の上半期における事故の内訳として、転倒・転落・服薬関係が多くを占めている。事故対応のマニュアルに沿って、翌日の朝礼にて事故の原因と対策を検討し、職員間で情報共有をしている

- ・具体的な事故の対策として、離棟対策ではセンサーの設置による安否確認、転倒の対策としてトイレなどにセンサーマットを設置し見守りができるように環境の設定を実施した。服薬事故の対策として服薬前の福祉医務課看護師とのダブルチェック、利用者様の服薬時の名前の確認、飲み込みの確認、薬袋の破棄時の残薬確認を実施している。

【地域との連携・交流に関するご報告】(杉原)

- ・地域との交流の様子について、ユニクロ出張販売・クレープキッチンカーの招致・ハンドアートプロジェクトへの参加・常葉大学保育学部学生による読み聞かせボランティア・地域ボランティアとの園芸活動・三施設交流会の参加それぞれ写真を交えて紹介をする。

三施設交流会参加者である利用者様の田中宏美様より、「わたしは、ボッチャとゲームをやりました。楽しかったです。時間はあっという間でほかの施設の人と話をする時間が欲しいと思いました。来年も参加したいです。」との感想あり。

4. 施設運営や地域連携等に係る意見交換

【ご家族様・関係者様】

- ・年間を通して行事は何回あるか。

「大きな行事は夏と冬の2回。2か月に一度ほど他の行事を開催し、1、2階合同で出来るものはコミュニティホールで盛大に行っている。」

- ・行事に利用者様の意見をどのように組み込んでいるか。

「夏と冬に行う大きな行事の前と後に利用者様にアンケートを実施し、利用者様の意向を組み込むように努めている。」

→本人の意思として、参加しない人の声も大事にしてほしいと思う。

- ・年間外出の回数は2回で間違いないか。また外出の距離の制限はあるか。公共機関を使っているのか
「概ね外出は2回している。春や秋の気候のよい季節を中心に、おひとりおひとりのご希望を踏まえての1日外出を行っている。距離の制限というよりは1日の内に帰ってこられる距離になるため遠くて箱根辺りまでを外出のエリアとしている。センター公用車を使用し、利用者様1名に対し職員1名対応にて、2名ずつの外出となっている。」

- ・施設が良く取り組みを行ってくれていると感じている。自宅に外泊行く方がどれくらいいるのか。コロナ禍で何年か外泊出来ない期間が経ち外泊に不安がある方に対しての支援が出来るか知りたい。
「今現在外泊を定期的に行っている方は3名ほど。ご自宅でも安心して過ごして頂けるよう、不安がある場合は個別で対応させて頂いている。外泊後の感染症対策における体調確認の方法として、居室での食事にご協力をいただいている。」

- ・施設移行前は歩行していたが車椅子になった。歩けるところがないか。

「ご本人様の身体の様子も含め、安全への配慮をしながら歩行訓練を行えるように、関係者間で話し合って範囲を決めさせていただいた。」

→施設として最大限の援助は利用者にとって何をする事と考えるか。安心安全の名のもとに行動制限をするのか、意見表明権として歩かせてほしいと言われた時にどう調整するのか。安心安全を第一にされては家族も何も言えないと思う。多少は怪我もしてもいいから、やりたいと思う事は個別支援計画に入らないのか。

「個別支援計画としては達成できるものを目標に掲げていくが、あげられた要望については身体状況や

専門職の評価をもとに、どうしたら安心安全に行えるかを協議している。」

→生活の充実よりも安心を優先するのか。

「ご本人様とご家族様の思いを大切にするが、怪我をする事で将来的な生活の質が下がってしまう事へのリスクがあることを意識しながら日々の生活の援助を考えている。」

5. 閉会あいさつ(尾崎)

以上